# 共に学ぶ生徒の育成を目指して
# 小・中・高の交流から

## 1．はじめに　― 平成16～19年度研究概要について ―

本校では平成16年度から平成17年度にかけての２年間は，「21世紀を担う生徒の育成を目指して」という研究主題を掲げ，それぞれの副題を平成16年度は「発達段階を見据えた『確かな学力』の探求」，平成17年度は「小・中の連携を見据えた中学校教育の探究」として研究を進めた。

まず，平成16年度では，「発達段階に応じた学習指導のあり方はどうあるべきか」という観点で，教科ごとに「確かな学力」を構成する様々な力の中から最も育成したい力を取り上げた。そして，その力に関して，各教科で現状の生徒の発達段階について作業仮説を立て，学習内容や教材設定を検討し，指導方法の改善を図りながら研究実践を行った。この研究実践を機に，小中および中高の連続性や段差に目を向け，中学校と小学校・高校の発達段階を念頭に置いて授業を展開すれば，子どもたちに，より「確かな学力」が身に付くのでないかと考えるようになった。

そして，平成17年度では，「確かな学力」に包含されるいくつかの力のうち，「問題解決力」を重要な力と位置づけ，各教科が実践に取り組んだ。ここでの問題解決力とは，「自分にふりかかる諸問題を解決し，たくましく生きていくために必要な能力や資質」とした。

平成18年度から平成19年度の２年間は，これまでの研究実践を土台として，学校教育の中で問題解決力を育成するには，これからの時代，他者とのかかわりの中で生徒が学習していくことが大切であるという考えの下，研究を進めることにした。そこで新たな研究主題を「共に学ぶ生徒の育成を目指して」と設定し，他者とかかわりながら共に問題解決にあたる生徒を育成するための授業のあり方を模索した。

具体的には，平成18年度では，副題を「コミュニケーション力を高める実践研究」とし，「共に学ぶ」ことの重要性や意義を体得させることを目的に，人間関係づくりやコミュニケーション力に焦点を当てて研究を推進した。本校ではコミュニケーション力を「他者理解の能力」と「自己表現の能力」であるととらえ，「共に学ぶ」ときには他者の意見を正しく理解し尊重すると同時に，自分の意見を分かりやすく表現する能力を生徒につける手立ての各教科で工夫した。また，「他者理解の能力」には，他者の言葉の論理的な意味を分析する「正確な理解力」と言葉の中に込められた他者の気持ち（心情）を推し量る「深い理解力」があるとの認識に立ち，この二つの能力に配慮しながら授業研究を行った。授業の工夫の一つとして，一部の教科においてコミュニケーション力を一層高めるために異学年交流授業を実践した。

平成19年度は研究副題を「異学年・異校種間交流授業を通した学び」とした。これは平成18年度研究実践では，多様な人間関係の中からコミュニケーション力を育てるには同学年だけでなく，異学年交流授業の実践が効果があるのではないかという作業仮説のもとにいくつかの教科で試験的に実践した。その結果，生徒にとって良い面があるとの結論に達し，平成19年度は異学年・異校種間交流授業に焦点をあて，その有効性や問題点，配慮すべき事項を追求してきた。さらに，中学校内の異学年交流授業だけでなく発達段階の差が大きい幼稚園・小学校・高校との交流授業を金沢大学附属学校園の連携という観点から附属幼稚園，附属小学校，附属高校の協力をえて異校種間交流授業という形で実践した。

## 2．今年度の研究

今年度は研究主題「共に学ぶ生徒の育成を目指して」の３年次として，昨年と同様に本校校長の諸岡康哉（金沢大学学校教育学類教授）の指導のもとに研究を進めることとした。昨年度の研究実践の成果や課題（平成19年度研究紀要参照）から「共に学ぶ生徒の育成」の中心は普段の同学年の授業であり，異学年交流授業や異校種間交流授業はその補完，発展や活用の場面として捉えていくこととした。

平成18年から19年度の研究でも取り上げたことだが，これからの社会は個人の力だけでは解決困難な問題が多く発生することが予想される。それには複数の人間が話し合いアイデアを出し合って困難な問題の解決を図る必要がある。そのためには，普段の学校生活や授業で「共に学ぶ」経験を積むことが大切である。平成20年度も，平成18年度から平成19年度の研究同様に他者とかかわりながら共に問題解決にあたることを「共に学ぶ」ととらえることとする。

平成19年度の研究と同じように，諸岡康哉教授の指導から「共に学ぶ」ことの認識論的な意義を次のようにとらえることとした。

・生徒同士が個々人の考えや認識を話し合うことで各自の個別的認識（一面的・主観的な認識）が普遍的・客観的な認識に高まる。

・人間が多面的に生活すればするほど認識の範囲が広く多面的になってきたように，生徒同士の横のコミュニケーションが広がるほど各生徒の認識力が深まる。

| |
|---|
| 「共に学ぶ」→　個別的認識から普遍的な認識へ　認識力の多面化・深化 |

また，学級で「共に学ぶ」ことを次のように考えている。

「共に学ぶ」とは，一人ひとりの意見や考えを他の生徒の意見や考えとかかわらせ，そこから生じる相互対立や相互作用を媒介に学習を成立させていくことである。単純化すると他を媒介とする媒介的思考を重視し，他者との相互作用の中で生徒の認識力を育てていくのである。

同一年齢の学級の中でも個人差（能力差・学力差・経験の差など）は見られる。能力差は授業にとって障害になるという見方もある。しかし，「共に学ぶ」授業においては，生徒の個人差を授業の原動力として位置づけていく。もちろん，個人差が直ちに授業の原動力になるわけではない。教師は意図的に授業の中で個人差を顕在化せ，ある学習課題に対して生徒の意見や考えの違いを明らかにし，各教科の論理とかみ合わせながら学習を進めていく必要がある。そのためには教師の発問が大切な役割を果たす。ここでの発問は生徒に問いを生み出すという意味の発問である。発問によって生徒の自問が生まれ，生徒一人ひとりの意見や考えが顕在化していくことになる。

更に，「共に学ぶ」授業づくりの方向性として次のように考えている。

授業を構成する場合，教師は教科内容を指導すると同時に，学習体制への指導を行っている。この意味で教師には教科的力量と共に組織的力量が求められる。「共に学ぶ」ためには教師の授業進行に生徒が一方的に従っていくのではなく自主的・積極的に参加していく生徒の学習体制を確立することが必要となる。教師が生徒に直接指導するだけでなく生徒同士による間接指導を促さなければならない。そのためには，生徒同士，生徒と教師が話し合えるような対等な人間関係を構築できるような関係づくりの指導が必要になる。つまり，「共に学ぶ」ための学習体制づくりには「他者の意見を正しく理解し尊重する能力と自分の意見をわかりやすく表現する能力」が必要となる。

この２つの能力を他者理解力と自己表現力とした。他者理解力と自己表現力の２つの能力をコミュニ

ケーション力ととらえている。学習体制の指導として，コミュニケーション力を育成していくことは重要である。

| コミュニケーション力＝自己表現力＋他者理解力 |
|---|

知・徳・体と言われることがよくあるが，知を重視すれば徳が弱くなり，徳を重視すれば知が弱くなるということではない。知と徳の内的関連や統一的把握という視点で考えていきたい。つまり，学校教育は学力形成が中心的な役割であるが，学力形成を中心とした授業を通じて人格形成も行われていくという見方である。授業で学力を形成していく過程は知識を習得するだけなく，分析力，思考力，判断力，表現力等も培われて行く。本校の目指している「他者理解力と自己表現力」も各教科の授業を通じて育成されていくと考える。

さらに，新学習指導要領で掲げられている思考力・判断力・表現力を育成する学習活動例として「体験から感じ取ったことを表現する」「事実を正確に理解し伝達する」「解釈し説明したりする」「互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させる」また，言語活動を充実させる場面として国語科はもとより，例えば「根拠を明らかにして筋道をたてて説明し伝え合う」「科学的な概念を使用して考えたり説明したりする」「自分の考えを基に書いたり討論したりするなどの表現する」「発表し合ったりするなどの活動」などが示されている。これらは「表現する」「伝達する」「説明する」「伝え合う」「発表し合う」など各教科におけるコミュニケーションに関する事項である。このようにこれからの学習活動ではコミュニケーション力の大切さが改めて取り上げられている。「表現する」「伝達する」「説明する」「伝え合う」「発表し合う」などの活動は本校が平成18年度から目指してきた自己表現力（自分の意見をわかりやすく表現する能力）と他者理解力（他者の意見を正しく理解し尊重する能力）が基盤になると考えられる。

今年度も生徒の自己表現力と他者理解力の育成を目指して研究実践を進めたい。

## 3．コミュニケーションについて

萱原道春教授（金沢大学学校教育学類教授）によると，人間のコミュニケーションには知的なコミュニケーションと情緒的コミュニケーションがある。知的なコミュニケーションは，主に他者と言葉を介して論理的に理解することである。情緒的コミュニケーションは，態度や口調に表れ，その中にある他者の気持ちを受けとめ共感することである。授業では知的なコミュニケーションが中心になるが，生徒と教師だけでなく，生徒同士の情緒的コミュニケーションが関係づくりに大切な役割を果たす。教師は次のような点に留意して授業実践する必要がある。

・しっかり聞くこと
・深く理解すること。つまり言葉だけでなく，その人の気持ちを表しているものや全体的な像を理解すること
・成熟した人格だけでなく未熟な人格をも受け入れること

## 4．「共に学ぶ生徒」やコミュニケーション力に関した本校生徒の実態

一斉授業の中では教師の問いかけに対して，どのクラスにも積極的に発言する数名の生徒が必ずいる。特に，優れていたり価値があると思う意見については進んで発表するようである。また，学年が上がるほど意見発表する生徒は少なくなり固定化する傾向がある。その一方で，自分の意見を持ちながらも自ら積

極的に発言しない生徒もいる。ただし，教師から発言を促すと，ほとんどの生徒が何らかの形で発言できる。しかし，発表の内容には個人差があり，理由や根拠まできちんと説明したり，他の人の意見に関連づけて自分の意見を発表したりする生徒から，単語だけで済ませるという生徒まで様々である。しかし，他の生徒の意見を見下したりすることはあまりない。素晴らしい意見については感嘆の声があがる場面もある。意見交換が少ない場合でも他者の優れた意見を取り入れている学習を深めていく生徒は多い。

一般的には，グループ活動では楽しそうに活動したり，自分の意見を発表したり，他者の意見に対して疑問点などを投げかけるなど活発に交流をしていることが多い。これは少人数のため全体で発表するより緊張感や恥ずかしさが薄れ気軽に話し合えるようである。これもグループの構成によって影響される。意見発表する生徒が少なくなる理由としては「第二次性徴期による恥じらい」「学級の人間関係」「生徒間の学力差の拡大」が考えられる。全体として授業ではまだ十分な情緒的なコミュニケーションの場になっておらず，「共に学び合う」姿勢がまだ弱いようである。

学校生活でも親しい友達同士では，会話も弾み楽しそうに交流している。そうでないと意思の疎通がうまくできなかったり，積極的に他と関わらないことも多い。時と場に応じた言葉遣いや態度をとれない生徒がもいる。全体的に相手の立場に立って，積極的にコミュニケーションする力が弱いのではないかと思われる。これからも教師の働きかけで「共に学ぶ」姿勢を育てていくことが求められる。

## 5．他者理解の能力と自己表現の能力を育成するための授業づくりの方向性

これまでの研究実践から次のような観点に留意して「共に学び合う」ための授業づくりを考えていきたい。

(1) 授業を知識伝達型だけでなく，学び合いの場へと転換する。
(2) 学び合いの中から知識が形成されていくような授業の流れづくりを考える。
(3) 生徒に自問が生み出されるような発問を工夫し，生徒の意見や考えの違いなどを顕在化させる。
(4) 生徒の意見の違いなどから相互対立や相互作用が行われるよう導いていく。
(5) 話し合い活動を積極的に導入し，受動的から能動的な話し合いへと導く。
(6) グループ学習を活用して生徒同士の学び合いを促していく。

## 6．小・中・高の交流授業について

### (1) 交流授業の意義

今の日本社会は少子化が進み，兄弟・姉妹で切磋琢磨の機会が減少したり親の過保護，過干渉が起きやすくなったりする状態になった。また，日常の子供たちの生活を見ると，塾通いが増えテレビゲームやインターネット普及により年齢の違う子供同士が一緒に遊び合う機会と時間が大きく減ってきた。このことにより異年齢の子ども同士の関係が希薄になってきている。また，核家族化などにより今の子どもたちは多様な人間関係から社会性やコミュニケーション力を身につける機会が減っている。一方，これからの社会では一層，自己表現やコミュニケーション能力の重要になると思われる。

親しい人同士ではコミュニケーションは順調に行われている。社会では初めて会った人，知らない人，普段あまり接することがない人，人生観・価値観の違う人，あるいは文化が違う外国人とコミュニケーションを取らなければならない場合がある。いつも親しい人の交流だけでは十分にコミュニケーション力は育つとは言えない。生徒会活動や部活動でも異学年交流は行われている。はじめに述べたように学校で教科の授業が中心で授業を通じて学力形成と共に人格の育成も行われいる。異学年

交流授業通じても多様な人間関係の中からコミュニケーション力を育てる一つの場となるのでないかと考える。普段あまり交流がなく発達段階も違う児童や生徒同士が共に学習することによってコミュニケーションをとる機会が生まれる。

### (2) 交流授業実施あたって

これまで，1年生と2年生，2年生と3年生，1年生と3年生というような異学年交流授業，小学生と中学生，高校生と中学生との異校種間交流授業に取り組んだ。1年生と2年生の交流授業より1年生と3年生の異学年交流が上級生として活躍できた。また，高校生に対する憧れや期待感が大きかった。

また，滝充国立教育政策研究所生徒指導研究センター統括研究官の研究によると「異学年交流が成功するには一般的に年の差が大きいほどよい。ある活動について先行経験がありよく知っている先輩がよく知らない後輩に教えることができるからである。教える側と教えられる側の差が大きいほどよい。上級生が導いたり，お手本を示したり，お世話をすることができる。このような経験は上級生に役割の自覚を促し自己有用感を高めることができる。」ということである。

これらのことからから今年度は校内の異学年交流授業より発達段階の差が大きい小学校や高等学校との交流に絞って検討していくこととした。

必修教科では教科の学習内容や授業時数から実施しやすい教科と実施が困難な教科がある。そこで，時間割上教育課程に位置づけて実施することが難しい場合には，その都度特別時間割を作って交流授業を行った。

そこで，今年度はまず選択の時間の発展的な内容として実践していく方向で昨年の経験を踏まえながら各教科で異校種間交流授業の可能性を検討した。国語科，社会科，数学科，英語科では3年選択の発展的な内容として年に数回高校と交流を実施することにした。家庭分野では必修の中学2年生と高校2年生，保健体育は必修の中学1年生と高校1年生で交流授業を実施してきている。また美術科でも小学生との交流を検討中である。更に総合的な学習では中学2年生が高校1年生の発表に参加したり，中学3年生が小学生に発表を見てもらうことにしている。

### (3) 交流授業のよさ

昨年度の研究実践から交流授業には次のようなよさがあると言える。

①下級生の素朴な疑問を上級生が今まで解決した方法や学んだ知識を用いて分かりやすく説明することでこれまで学んだ学習内容の理解を深めることができる。

②上級生が普段共に学んだり交流していない下級生の理解度を把握しながら分かりやすく表現したり，説明したり発表することで他者理解力や自己表現力を伸ばすことができる。

③下級生は普段あまり交流のない上級生の意見を良く聞き理解しようとすることから普段の授業以上に他者理解力を伸ばすことができる。

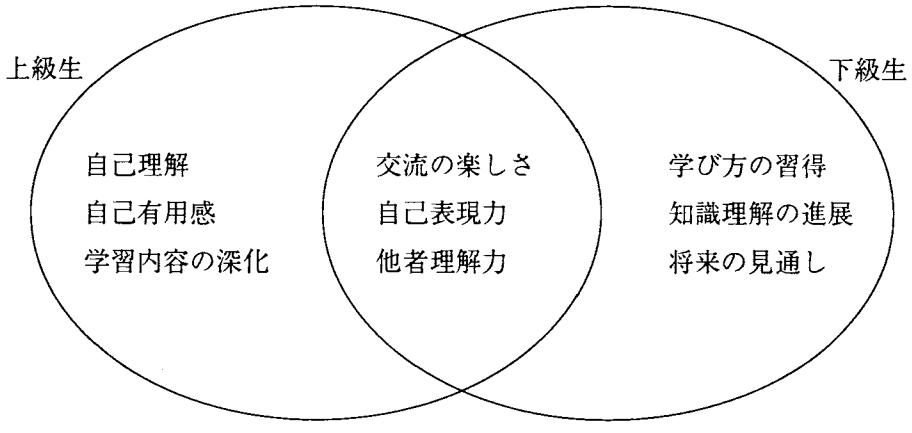
④上級生の進んだ表現方法，学習方法，教科の進んだ知識を生徒の目線で学ぶことができる。
新鮮な人間関係の中で，下級生は上級生の発表をよく観察し，資料・図の活用方法を学び，深い考察を知ることができる。

⑤下級生の評価を受けることで，上級生の自己評価が高まる。

⑥中学生にとって高校生を含めて上級生と交流授業を行うことは近い将来の教科学習を予想でき，将

来の自己像を予想できる機会を持つことができる。上級生は下級生を見ることでかつての自分の姿が見え自己理解も深まる。

⑦様々な下級生と関わる体験から上級生は下級生を指導することで「役に立った」という自己有用感を持つことができる。




### (4) 作業仮説と交流授業の展開

昨年度と同様に次のような交流授業についての考え方から次のような作業仮説をたてて研究実践を進めることとした。

作業仮説

| |
|---|
| 交流授業を通して上級生と下級生による学びの交流が行われることで，学習内容の深化，学び方の習得の促進，自己表現力と他者理解力の育成が期待できる。 |

また，これまでの研究実践をもとに次のような観点で交流授業を考えていきたい。

①異校種の教師間で事前に交流授業のねらい，学習内容，生徒（児童）の役割についての協議を行った上での授業実践する。

②異校種間交流授業で楽しいなど成功体験ができるように教師側の十分な授業設計が必要である。

③生徒間の学力差，経験の差があっても，多様な見方ができ学習効果が上がる教材を考える。

④同じ題材で学習する場合でも上級生と下級生の学びは違う。教師は同じ学習場面でも上級生と下級生とで別の目標を設定して授業を設計する。

⑤課題の難易度を考え，上級生が自信をもって下級生と活動できるような課題を設定し，生徒（児童）の活動が促進されるものにする。

⑥一般的には上級生は下級生より学力は高いはずであるが，現実には上級生の学力が高いとは限らない場合もある。知識的な学力面だけでなく，レポートの作成や発表の仕方など学習方法等の面で上級生の経験が生かされるように配慮していく。

⑦高校生との交流授業では高校生がリーダシップを発揮して学習活動を進められるように，高校生へ活動のねらい，活動内容，予想される問題点の整理などの事前指導を協議しておく。

## 7．これまでの研究実践の成果と課題

平成19年度から平成20年度まで異校種間の交流授業や活動を通じて小・中・高の交流を行ってきた。生徒にとっては交流授業や活動を通して他者理解力と自己表現力の育成につながると考えたからである。一方，教師にとっては異校種の授業参観や協議会を通して小学生や高校生の発達段階の理解や小中高を見通した教材観が深まり，教師の指導法の改善に役立つ面があると考えた。

教師間の交流については，金沢大学附属学校園の中期目標が設定されてから附属学校園の連携について検討されてきた。特に学校教育学類・附属学校園研究推進委員会（旧教育学部・附属学校園研究推進委員会）が中心となり幼・小連携，小・中連携，中・高連携，心理教育相談，特別支援教育，学校安全の各小委員会で附属学校園としての研究協議を進めてきた。その中で特に小・中連携，中・高連携では中学校と小学校，中学校と高校が連携や交流できることについて協議し実践してきた。学校教育学類・附属学校園研究推進委員会を生かしながら学校研究を進めてきた。

### (1) 小・中交流では

数年前からの小・中連携小委員会では次のようなことが話し合われ可能な限り実践してきた。

① 授業について

・中学校のオープンスクール，小学校の学校開放の日などを中心に，互いの授業を参観する。

・新指導要領の教育課程について情報を交換していく。

・校内研究授業の案内を出し，できる限り授業を参観し授業後の整理会にも参加する。

・高校も小中の意見交換の場に参加し，高校の立場からの意見を述べ，小中高の授業のあり方を相互理解していく。

② 児童会と生徒会について

・児童会と生徒会が話し合う機会を持ち，行事などでお互いがかかわることのできる活動を出し合い，可能な委員会ごとに交流活動を行う。

・栽培活動について，理科プロジェクト(小)と園芸委員会(中)で触れ合い広場でプランター栽培をする。

・新聞関係の委員会では，中学校の蛍雪新聞を小学校に掲示し，小学校の児童会新聞を中学校に掲示する。

・中学校保健委員会が小学校健康プロジェクトと合同の「手当て講習会」を企画し実践する。

③ 小学生に中学校生活を理解してもらうために

・仮入学式に，中学１年生が小学校向けに学校紹介をする。

・小学校玄関前のテレビに，中学校の行事の活動ビデオを流す。

④ 生徒指導の面では

・小中の生徒指導・生活指導担当者が定期的に情報交換を行い，それぞれの学校について先生方が共通理解できるようにする。

・学校生活のきまりについて情報交換や見直しを行う。

・小中それぞれにみられる具体的な子どもの問題行動について情報を交換する。

・保護者に子どもたちの現状を伝える方策を考える。

特に，中学校保健委員会は小学校健康プロジェクトと合同の「手当て講習会」を行った。中学生はお世話をする役割，小学生は中学生に教えられる役割を通して，共に活動することを経験した。生徒は企画を肯定的に評価し，交流についても，楽しく仲良くなれたと答えている。ただ，時間的な制約

があり，企画や準備の面で生徒中心に進められなかったことや事前の練習が不十分だった。そのため，参加に対して受身になった中学生も若干いた。今後どのような交流が図れるか，小中小委員会を中心に学校園全体で考え，話し合っていく必要がある。

教科の交流では平成19年度，選択英語の中学２年生と小学４年生が交流授業を４回行った。その中で次のような面が見られた。

・中学生が小学生に発表の練習をさせたり，上手に言えた小学生をほめたりする場面がしばしば見られ，小学生のうれしそうな表情を見て中学生は自己有用感を高めることができたようである。
・中学生がグループ活動をリードしていくことができるようになり，グループ活動が円滑に進むようになっていった。
・中学生は，普段のように話していても小学生には通用しないことを身をもって理解し，「分かりやすく語りかける」ことの重要性を学んだ。
・中学生の教えやアドバイスを聞き，自信をつけて発表する小学生の姿が見られた。

ただ，課題があまり簡単すぎると小学生でもで活動意欲が高まらないので，知的な発見がある要素を授業に取り入れていく必要がある。また，題材によって英語が分からなくても内容が理解できてしまう授業になってしまうので題材の選定が難しい。また，英語の習熟の面から課題の設定や実際の授業の場でうまくいかないことが少なからずあった。

英語科以外でも交流授業を検討した教科もあったが，中高に比べて知識的な面の差の大きさや授業時間の設定，小中の研究主題の違いなどから授業の交流は英語科とこれから実施予定の総合的な学習にとどまった。 しかし，教師間の意見交換や委員会活動での交流は研究主題からも有意義であった。

**(2) 中・高交流では**

中・高の交流は中高小委員会を基盤として交流授業を行った。平成19年度は国語科，数学科，保健体育科が先行的に交流授業を実施した。更に，平成20年度は国語科，社会科，数学科，英語科の３年選択の発展的な内容として年に数回高校と交流授業を実施した。また，家庭分野では中学２年生と高校２年生，保健体育科は中学１年生と高校１年生，総合的な学習では中学２年生と高校１年生が交流授業を実施した。

国語科では中学２年生（今年度は中学３年生）と高校２年生が交流授業を実施した。読書教材を取り上げ，事前に「読書郵便」という形で中学生が高校生にお薦めの本を紹介したり，読書に関する質問を書いたりして送った。それに対する返事を高校生が当日持参した。中高の混合のグループ活動では，読書郵便への返事をもとに，グループ内で意見交換を行った。「読書郵便」を書くという活動には，どの生徒も意欲的に取り組んでいた。３学年離れた高校生が相手なので，かなり緊張しながらもあこがれの先輩との交流を楽しみにしているようであった。アンケートの結果では，９割の生徒が楽しかったと答えた。また，高校生の分かりやすく伝えるための話し方や発表の仕方を学んだと答えている。そして，自分たちが話しやすいようにしっかりと聴いてくれたことに感動したようである。中学生は高校生の「自己表現力」と「他者理解力」に触れ，「伝え合う」にはどうすればよいかを学んだようである。

社会科では，中学校の各学年の学習内容に該当する高等学校の授業を，中学生が参観するという形で行った。高校の授業を体験して，多くの生徒は進度の速さと内容の深さ・難しさに驚いていた。中学２年生は難しいという感想が多かったが，中学３年生は中学の学習内容が高校での基礎であり，高校では更に発展した内容を学習することを実感したようである。高校の授業は大変だと感じたが，中学校でしっかりと学習すれば高校で学習を深めることができるという意識を持ったようである。

数学科の交流授業では，高校生が中学生に数学的な表現を用いて分かりやすく説明する場面がある。中学生は高校生の進んだ数学的表現，数学的な見方・考え方，進んだ知識を間近で学ぶことができた。ただ，題材が難しすぎる場合，高校生に教えてもらったのでよかったという班もあれば，中学生が高校生に教えている逆転現象が起きた授業もあった。「論理と集合」の交流授業が，中学生にとっても実のある内容だった。高校生は中学生の役に立ったという自己有用感を感じ，中学生も，「高校生ってすごい」というあこがれや高校の知識を得られたという満足感がえられ，命題を数学的に述べる表現力がついたと感じたようである。

家庭分野では中学２年生と高校２年生が「私が築く食の安全・安心」という課題で交流授業を行った。課題解決へ向けての話し合い，自分の考えを正しく伝える表現活動，生活経験の乏しい生徒たちが課題を見つけ出すための体験や実習を実践した。高校生はしっかり調べてよく考察した発表を行ったので，中学生がさすが高校生の発表であると感じることができた。

保健体育科では昨年度は高校１年生と中学３年生が球技（バスケットボール）で交流授業を実践したが，１年の学年差では能力的にも同じか，それ以上の能力を持つ中学生も多くいることで逆転現象が起き，意欲も少し減退していった中学生もいた。そこで，今年度は，高校１年生と中学１年生との交流授業を，同じバスケットボールで行った。中学生はなかなか先輩に聞く勇気がなく，言われたら答えるという生徒が多かった。しかし，事後のアンケートからは新しい練習方法を知ったり，高校生の動きの速さや正確さなど刺激を受けている面が見られ，直接会話をしなくても通じ合うものがあった。

英語科では中学３年生と高校２年生の交流授業をおこなった。同じような発達段階にいる両者はある程度英語に習熟しており，実践できることや表現することのバリエーションも小中交流授業よりは確実に増やすことができた。学習形態も小中よりは中高のほうが類似しており，「書く・読む・聞く・話す」の４技能を全て学ぶ。このようなことから中高生の交流は，学習活動も比較的スムーズに進んだ。

各教科の交流授業の実践からは次のような面が見られた。

① 高校生をお手本として話し方・発表の仕方などの表現方法を学ぶ機会を持つことができた。

② 中学生は高校生の使う少し難しい表現や説明に直接ふれて，高校生への憧れを持ったり，近い将来の目標について考える機会ができた。

③ 将来，高校の学習に臨むにあたって中学校の学習内容が高校の基礎となっていることを理解し，高校の学習に対する見通しを持つことができた。

④ 高校と中学校の教師が交流授業実施に向けて何度も話し合った結果，お互いに発達段階や教育課程について理解が深まった。また双方の，考え方の違いについても知りえた。

しかし，次のような課題もまだある。

① 学習課題や題材が適切な場合は効果的な実践ができたが，そうでないと逆転現象ができ，高校生がお手本を示すとができないこともあった。学習課題の設定の難しさを改めて感じた。今後も交流授業を続ける場合，学習課題について更なる吟味が必要である。

② 様々な学習課題によって高校生がお手本となったり，リーダー性を発揮できる場面の設定を綿密に考えていく必要がある。

③ 高校生が中学生の話を良く聞いたり，配慮しながら説明したりする態度にふれることができたが，そのことが同学年の普段の授業にまだ十分に生かされているとは言えない。

④ 同学年の授業中に「分かりやすく伝える」ことのできる生徒がかなりいる。一方，まだ十分でない生徒もいる現状である。

# 研　究　同　人

校　長　　諸岡康哉

副校長　　坂口　匠

教　諭　　石田明美（国語）

〃　　端名秀雄（国語）

〃　　橋本正恵（国語）

〃　　西野哲之（社会）

〃　　石田了子（社会）

〃　　小山　均（社会）

〃　　浜口国彦（数学）

〃　　松原敏治（数学）

〃　　戸水吉信（数学）

〃　　室　百世（理科）

〃　　岩田哲也（理科）

〃　　辰巳　豊（理科）

教　諭　　西澤　明（美術）

〃　　志村信幸（保体）

〃　　佐々木久美子（保体）

〃　　鶴見昭子（技・家）

〃　　中村正寛（技・家）

〃　　小川正清（英語）

〃　　菅原信一（英語）

〃　　端崎圭一（英語）

養護教諭　　沢田有香

平成20年3月転出　　表　洋一（保健体育）